高知女子大学看護学会誌　VOL.38,NO.1,pp105～111　2012

第38回高知女子大学看護学会ワークショップ

ワークショップⅠ：事例のふり返りから学ぶ力

【コーディネーター】

畦　地　博　子　　高知県立大学（33期生・博士２期生）
大　西　ゆかり　　高知県立大学（博士８期生）

【企画の意図】

事例をふり返ることで、私たちは何を学び、どのような力を得ているのか、事例を学ぶことを支える力とは何なのか考えていくことを目的とする。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者：三　浦　由紀子　氏（高知医療センター 小児看護専門看護師）

さまざまなケースをチームでふり返った経験が紹介された。このような経験を通して、ケースを振り返ることは、チームに対する教育的な意味を持つと同時に、患者・家族と向き合うことであり、医療チームと向き合うこと、そして自分自身と向き合うことでもあると考えていることが語られた。

話題提供者：鍋　島　理　佐　氏（近森病院第二分院看護師　卒後５年）

病院のシステムに事例検討やカンファレンスが組み込まれ事例をふり返る機会が多かった中で、特に印象深い２事例が紹介された。事例検討を通して、患者理解を深め、患者－看護師関係のふり返り、自己洞察を行う機会を得たこと、また、参加者（先輩看護師ら）と話し合うことにより、それまで混乱していた情報が整理され、困難だと思っていたことも何とかなるかも…という希望が見えてくると感じていることが語られた。

【交流会でのディスカッション内容】

ディスカッションに参加してくださった皆さまからも、さまざまな事例をふり返った経験が語られた。話題提供者のお話と参加者の意見を通して、事例をふり返ることで、皆さまが新たな視点を得て、ケースと向き合う力をもらい、実践を変えることができるという貴重な経験をし、「経験が宝物になった」と感じていることが分かったように思える。ただ、不安や行き詰まり感、違和感を抱えながら、事例をふり返ろうと思えるようになるには、気づきを大切にできる力、患者と家族と向き合う力、自分と向き合う力、そして何よりも、周りの支えが必要であることが明らかになったように考える。

ワークショップⅡ：看護専門職としての自己を育てる力

【コーディネーター】

松　永　智　香　　社会医療法人近森会近森病院第二分院（51期生・修士８期生）

【企画の意図】

自らの自己教育力を高めると共に、臨床現場で後輩たちを育成している方々の実践知を語っていただくことにより、参加者が、看護専門職としての自己を育てる力について探求していく機会につなげる。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

森本志保氏からは、院内外の継続教育を受け、学ぶことの楽しさや達成感を修得したこと、現在、近森病院教育担当師長として、教育体系の構築やスタッフ個々の強みを伸ばすことに力を入れていることが話された。

原田千枝氏は、臨床で小児病棟に勤務され、教育委員担当になった際、教育に対する探求心が芽生え大学院への進学を決めたこと、２年間大学で助教を勤めた後、現在、高知大学医学部附属病院教育担当師長として、さらに充実した教育の仕組み作りを考えていることが話された。

岡本眞知子氏（細木ユニティ病院看護部長）は、教育者としての経験知と共に精神科看護のスペシャリストとして、「楽しく受苦せし者は学びたり」と看護職としての学びについてマクロな視点で話された。

【交流会でのディスカッション内容】

修士に進学してきた看護師の多くは、「もっと学びたい」という欲求や「なぜ？どうして？」という問題意識などの内発的要素があり、それらを獲得するためには、「環境」「関わり方」「タイミング」「サポート」が必要な外発的要素であったという話し合いがなされた。修士への進学を決めた際に、職場環境や上司の価値観や関わり方などの対応や仲間の状況、また学びたいと思ったときの自らのライフステージや家族の状況などが影響していることも共有された。つまり「もっと学びたい」という欲求や「なぜ？どうして？」という問題意識などの内発的要素を持っている人や、持てる可能性のある人には周囲からの教育的な働きかけやそのタイミングにより、学びの効果があるといえる。

また、自己教育力が低いと感じる人への働きかけについては、今後の課題として共有された。

ワークショップⅢ：シミュレーションで高める実践力

【コーディネーター】

寺　岡　美千代　　高知医療センター　　（修士11期生）
谷　　めぐみ　　高知大学医学部附属病院（46期生）

【企画の意図】

目的や対象者に合わせて、どのように研修を組み立てていけばよいか、いくつかの活用事例を紹介し、実際に参加者に体験していただきながら、効果的なシミュレーションの在り方について意見交換を行う。

【話題提供者の紹介及び話題提供者の概要】

話題提供者：大　川　宣　容　氏（高知県立大学看護学部准教授）

今なぜシミュレーションなのか？また、シミュレーション教育が日本に導入された歴史的背景や概要について説明をしていただいた。

話題提供者：井　上　正　隆　氏（高知県立大学看護学部助教）

シミュレーションの種類が紹介され、対象者や目的、期待される成果に合わせて選択すること、シミュレーションは「テスト」ではないこと、「場面のふり返り」や「事例に向き合う前のイメージトレーニング」などにも活用できることを話していただいた。

また、参加者全員でシナリオ作成からシミュレーションの実施、ふり返りを体験した。

【交流会でのディスカッション内容】

前半は、臨床では状況判断能力の向上や開発のためにシミュレーション教育を活用しており、シミュレーションの目標を明確に伝え、評価方法をより具体的にすることで教育効果を高めることができること、さまざまな場面（急変事例、医師－看護師間のコミュニケーション場面ほか）のふり返りのみならず、その場面に遭遇したスタッフに対して、同僚や先輩、上司としてどのように関わることができたかをふり返ることにも活用できることが確認された。

後半は、手術直後、帰室した患者に人工呼吸器を接続するという場面設定のもと、参加者でシナリオを作成(目的、到達目標、具体的行動、評価)し、実際にシミュレーションを行った。シミュレーション場面を撮影し、映像を見ながら効果的なシミュレーションについて意見交換を行った。設定した目標に合わせた行動やふり返りをすること、できるだけリアルに実際の場面を体験できるよう環境を設定すること、指導を受ける側の心理面に配慮することが重要であるとの意見交換がなされ、効果的なシミュレーションの実践を共有することができた。

ワークショップⅣ：状況を変えていく交渉力

【コーディネーター】

松　本　鈴　子　　高知県立大学
和　泉　明　子　　高知学園短期大学（35期生・修士９期生）

【企画の意図】

交渉力は、さまざまな職種との連携が必要となる保健・医療の現場において、大切なコミュニケーションスキルである。このワークショップでは、事例をもとに、状況を変えていくための効果的な交渉の技術とは何かを、参加者と共に考えることを目的とした。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者の小迫冨美恵氏（横浜市立市民病院がん看護専門看護師）より、外来化学療法室開設に伴う準備プロジェクトへの取り組みについて、そのプロセスを丁寧に紹介していただいた。特に他職種とのやり取りの場面では、職種ごとの価値観の違いや、お互いが合意形成するまでの具体的な交渉の方法、その時の感情の揺れまでも詳細にお話しいただいた。

【ワークショップでのディスカッションの内容】

参加者からは、事例に対して、より具体的な質問が投げかけられ、プロジェクトを進める中での交渉の難しさや、その際の感情のコントロールの必要性などについてディスカッションが行われた。その中で「交渉するには、まずはお互いをよく知ること」「交渉が膠着したら第三者を入れる」「状況を変えたいとき、相手と戦いに行こうとするとうまくいかない」「何かに没頭すると周囲が見えなくなるので、広く見る視野が必要」「交渉のタイミングを計る」などの具体的な交渉の技術について確認することができた。

また、実際に参加者が体験した交渉の場面での困り事についても意見交換がなされ、現場ですぐにでも活用できる内容となった。

ワークショップⅤ：現場の課題に取り組む力－災害に焦点をあてて－

【コーディネーター】

山　本　雅　子　　高知県健康長寿政策課（23期生）
北　村　真由美　　高知市地域保健課　　（34期生）

【企画の意図】

東日本大震災では、多くの看護職が支援活動に携った。近い将来必ず起きる大震災に備え、日頃の活動の在り方を見直すと共に、災害時に主体的に活動できる看護職の育成について、参加者と一緒に考えることを目的とした。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

話題提供者として、高知県立大学看護学部の森下安子教授と石川麻衣准教授をお迎えした。お二人には、東日本大震災後に宮城県南三陸町に派遣された高知県・高知市保健師チームの支援活動の分析結果について報告していただいた。活動内容と合わせて時間軸に沿った医療・保健・生活ニーズ及び課題の変化について報告された。災害時の保健活動においては、いかに早く保健活動の態勢をつくるか、いかに住民の力をつけておくかが重要といったことが示唆された。

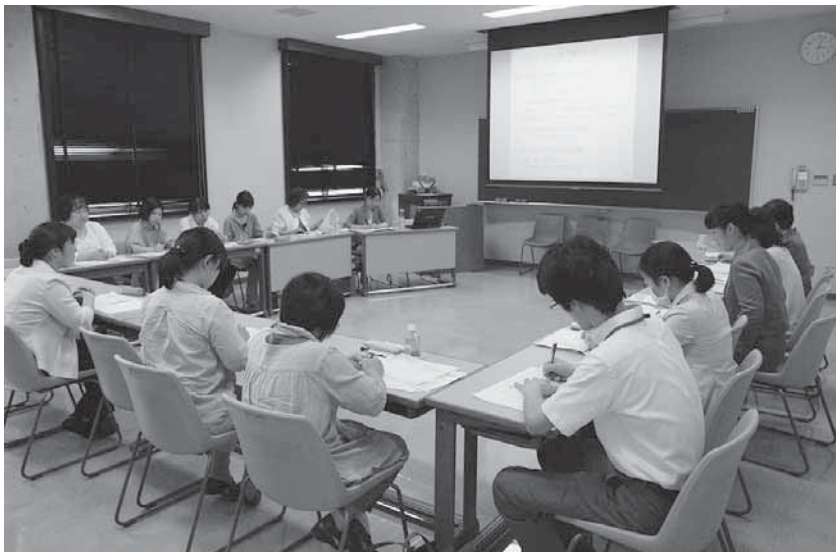
【交流会でのディスカッション内容】

話題提供者の話を聞いた後、参加者が自己紹介をしながら、それぞれの震災時の体験やその後の取り組み等について話を出し合った。

参加者の約半数は災害支援の経験がなく、災害時に自分が指示しなければならない立場になった時に果たして動けるか？といった不安や、具体的にすべきことを勉強しておく必要があるなど危機感を持った声が聞かれた。

災害支援の経験者からは、日頃の保健活動で地域に入り込み地区組織などとつながりのあった地域では支援活動がスムーズにできたとの話があり、日頃の活動の重要性を改めて確認した。

また、防災対策として、具体的な健康教育等で住民への防災教育を行い、いかに住民の力をつけておくかが重要であるという意見もあった。保健師、看護師、教員などそれぞれの立場でこれから取り組むべき課題を確認することができた。



ワークショップⅥ：他職種と連携する力－子どもの心を守る取り組みをとおして－

【コーディネーター】

福　田　亜　紀　　医療法人精華園　海辺の杜ホスピタル（42期生）
森　口　美　奈　　公益財団法人　高知県総合保健協会　（37期生）

【企画の意図】

子どもの心の健康を守るための取り組みの例をとおして、対象者の健康課題の解決に向けて、看護専門職として他職種と連携する力についてディスカッションを行い、その獲得・向上のための方法について探る。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

高知県立中村高等学校西土佐分校養護教諭の岩井由里氏、滋賀県立精神医療センター精神看護専門看護師の福岡雅津子氏を話題提供者としてお迎えした。

岩井氏からは、心の不調を自ら訴えた生徒との関わりを通して、学校内での連携やスクールカウンセラー、クリニックの医師、臨床心理士と保護者との連携をどのようにして行ったかについてお話いただいた。

また、福岡氏からは、摂食障害の高校生への支援の中で保護者、学校、病院内の他職種とどのように連携したかについて紹介いただいた。

【交流会でのディスカッション内容】

養護教諭、小児科の看護師、精神科の看護師、自治体や健診機関の保健師と、さまざまな領域からの参加があり、参加者の日頃の活動の紹介も踏まえて、意見交換がなされた。

ディスカッションでは、多職種と連携する力として、連携の必要性や時期、相手を見極める力、自分や連携する相手、支援チームの力量や準備性、それぞれへのニーズを見極める力、伝える情報の種類や範囲を見極める力、誤解が生じないように情報を伝える力、などが挙げられた。そして、連携する際には、何よりも対象者本人と家族の力を大切にして、支援の上で自分が重視している事柄を積極的に伝えることの必要性も確認された。また、普段のネットワークづくりの大切さを再認識するに加えて、地域保健活動と学校との連携における課題についての話題もあがり、組織を越えた連携における個人情報保護の難しさについて考える機会となった。

ワークショップⅦ：患者さんから得る力－新人のためのワークショップ－

【コーディネーター】
瓜　生　浩　子　　高知県立大学（修士４期生）
石　井　　歩　　高知県立大学（49期生）
芝　﨑　　恵　　高知県立大学（47期生）

【企画の意図】

専門職者としてのスタートを切ったばかりの新人同士で、患者さんとの関わりを通して学んだことや感じたことを共有し合うことで、プロとしての厳しさに直面する中で、辛さを乗り越え成長していくためのエネルギーを得る場とする。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

本ワークショップでは、特定の話題提供者は設けず、参加者全員が就職後の状況や体験を語り、共有する全員参加型の会とした。

参加者は12名で、それぞれに勤務先の特徴や就職後３ヵ月の状況について語ってもらった。その中では、各勤務先での看護の大変さや難しさ、イメージと現実とのギャップ、業務と患者さんを看ることのどちらを優先すべきかの葛藤、同期の看護師と比較しネガティブな考えになってしまうこと、５～６月はうまく仕事ができず辞めたいと感じていたこと、できることが少しずつ増えていると感じていることなどが出された。

【交流会でのディスカッション内容】

患者さんとの関わりで印象に残っていることとしては、「看護師さん」ではなく「○○さん」と呼んでもらえたこと、「新人の方がよい」と言われることがあり、今の自分にしかできない看護があると感じていることなどが、挙げられた。そして、新人だから業務はできないことが多いが、患者さんの話をじっくりと聞くことだけは頑張っている、患者さんに少しでも明るい気持ちになってほしいので、この看護師に出会えてよかったと思ってもらえるよう笑顔で関わっている、患者さんとじっくり向き合おうという新鮮な気持ちを大事にしたい、といった前向きな意見が出された。

また、辛い気持ちを共有でき、自分一人ではないと勇気づけられた、自分中心に考えるのではなく対象者のためにと考えるとまた頑張れそう、といった感想も聞かれ、この数ヵ月の体験をふり返り、気持ちを新たにする機会になったようであった。